

施行。いずれも鼠径ヘルニアの診断であったが、大腿ヘルニアを強く疑い、手術施行した。大腿管内にヘルニア嚢を認め、ヘルニア嚢根部にて二重結紮を行った。【結論】小児鼠径部ヘルニア中、0.4%前後と稀な疾患で、若干の文献的考察を加え報告する。

14) 下行大動脈からの AC バイパス術後に発症した閉塞性肺炎を合併した肺癌に対して左肺摘除を行った1例

嶋村 和彦・渡辺 健寛
土田 正則・大和 靖 (新潟大学)
大関 一・林 純一 (第二外科)

症例は63才男性。下壁梗塞、狭心症に対し平成5年1枝バイパス (Asc.Ao→#8, SVG 使用)、平成6年左開胸下2枝バイパス (Desc.Ao→#7, #4AV, SVG 使用)の既往がある。平成10年7月健診で胸部異常影を指摘された。精査にて左上区枝を閉塞する大細胞肺癌 (CT2N0M0)と診断した。閉塞性肺炎併発に対し抗生物質の投与を行いつつ、10月23日左大腿動脈からの IABP 補助下に循環動態を安定させながら左開胸術を施行した。左肺動脈本幹および下葉に腫瘍の浸潤を認め、左肺全摘術を施行した。術中下行大動脈からのグラフトを確認、流量を測定しえた。下行大動脈からのグラフト術後同側の肺摘除を行った稀な症例なので報告する。

15) 川崎病による冠動脈狭窄を有する2才女児に対して両側内胸動脈を用いた CABG を行った1例

島田 晃治・大関 一
高橋 昌・中山 卓 (新潟大学)
竹久保 賢・林 純一 (第二外科)

症例は2才女児。生後3ヶ月時に川崎病に罹患し、両側冠動脈瘤・冠動脈狭窄を発症し外来経過観察されていた。左冠動脈主幹部および前下行枝の狭窄が一年間で急速に進行したため CABG を施行した。長期開存率と成長の因子を考慮して左右内胸動脈をそれぞれ前下行枝と回旋枝に吻合した。術後経過は良好であったが、術後の冠動脈造影ではそれぞれ軽度の吻合部狭窄を認めた。現在無症状であるが、嚴重な経過観察が必要であると思われる。

16) 当科における低侵襲小切開心臓手術 (MICS) の検討

中沢 聡・名村 理 (新潟市民病院)
吉谷 克雄・金沢 宏 (心臓血管外科・呼吸器外科)
山崎 芳彦

平成10年3月より成人開心術6例に MICS を試みた。男3例、女3例、年齢21~56才 (平均44才)。心房中隔欠損症の閉鎖術4例、僧帽弁閉鎖不全、大動脈弁閉鎖不全に対する弁置換術各1例であった。皮膚切開は約10cmとし、胸骨体部下縁より逆L字型の部分胸骨正中切開で、上縁は第1または第2肋間に切り込んだ。5例はこの切開で手術可能であったが、ASDの1例で大動脈遮断困難のため全胸骨正中切開に変更した。送血は上行大動脈送血2例、大腿動脈送血3例、脱血は AVR では two stgs cannula による1本脱血、他は術野より上下大静脈に2本脱血を施行した。中等度低体温、大動脈基部より心筋保護液を注入し心停止、心内操作には特に支障はなかった。術後創感染はなく、疼痛及び美容上の患者の満足度は高かった。

17) フォンタン手術6例の経験

宮村 治男・菅原 正明 (長岡赤十字病院)
富樫 賢一・佐藤 良智 (心臓血管外科)
矢崎 諭・廣川 徹
桑原 厚 (同 小児科)

1996年7月~1998年6月の2年間、6例にフォンタン手術を施行し、全例に生存を得た。疾患内訳は、三尖弁閉鎖4例、単心室1例、右室低形成+肺動脈閉鎖1例で、うち2例は肺動脈絞扼術後であった。術式は、TCPC型吻合3例、右心耳・肺動脈吻合2例、その他1例であった。術前の平均肺動脈圧18mmHg以下、肺血管抵抗 (Rp) $2u \cdot m^2$ 未満の1例は術後経過順調であった。平均 PA 圧20mmHgの1例および Rp $2u \cdot m^2$ 以上の4例では心不全、腎不全、肝不全等の合併がみられ管理に難渋した。高肺血管抵抗の症例では長期の綿密な管理が必要である。